



# 全日本テニス選手権大会



## 90年のあゆみ 1



▲1922年4月、ニューヨークカップ到着を記念して。左から、熊谷一彌、渡辺恒次郎（三井物産、台覧試合で審判）、山崎健之丞（東京ローンテニス倶楽部会員）、鎌田芳雄（三井物産、協会理事）、朝吹常吉

### 日本庭球協会の設立と共に

朝吹常吉を中心として、日本庭球協会（現日本テニス協会）設立の準備段階の1921（大正10）年、デビスカップ幹事国であった米国庭球協会に参加申込して、日本はデビスカップ戦に初出場した。熊谷一彌（くまがい いちや、1890年9月10日-1968年8月16日）、清水善造（しみず ぜんぞう、1891年3月25日-1977年4月12日）、柏尾誠一郎（かしお せいいちろう、1892年1月2日-1962年9月6日）の活躍で準優勝という輝かしい成績を収めた。その翌年の1922（大正11）年3月、日本庭球協会の創立発会式がおこなわれ、日本テニス界を統轄する組織整備が実行された。協会の主要事業の一つに、全日本庭球選手権大会を開催することが盛り込まれた。第1回大会は同年の9月に開催され、最初に実施された協会主催大会であった。

### 記念すべき第1回大会

1922（大正11）年9月9日から15日まで、日本庭球協会主催の第1回全日本庭球選手権大会が、本郷の東京帝国大学テニスコートで開催された。シングルスは63名、ダブルスは26組であった。シングルス優勝者にはニューヨークの日本倶楽部から寄贈された「紐育杯」、ダブルス優勝者には摂政宮殿下からの下賜金で謹製した「摂政宮杯」が授与されることになった。シングルスは、福田雅之助（ふくだ まさのすけ、1897年5月4日-1974年12月21日）が決勝戦で太田芳郎（おた よしろう、1900年1月11日-1994年3月29日）を破り、栄える初代チャンピオンとなった。ダブルスは安部民雄・川妻柳三組（早大）が優勝した。



▲第1回全日本選手権大会優勝  
左から川妻柳三（複） 福田雅之助（単） 安部民雄（複）

### 東西交互開催から有明開催へ

第2回大会（1923年／大正12年）は、大阪府豊中市の築港テニスコートで開催され、89名がエントリーしたシングルスは原田武一（はらだ たけいち、1899年5月16日-1978年6月12日）が決勝で鳥羽貞三（とば ていぞう、1901年9月15日-2002年1月18日）をフルセットの末に破り優勝、24組がエントリーしたダブルスでは安部・川妻組が二連覇を達成した。



▲ 1955年第30回田園コート



▲ 1957年第32回パレスコート



▲ 1960年第35回うつぼコート



▲ 第60回(昭和60年)記念大会での歴代のチャンピオン  
 写真前列左から、米沢そのえ、太田智恵子、村上麗蔵、加茂公成、  
 宮城淳、西尾茂之、坂本真一、平野一斉、坂井利郎、中央左から、  
 宮城黎子、雉子牟田明子、後神澄江、黒松和子、村上智佳子、  
 原久子、野村貴洋子、木全豊子、井上早苗、福井昭子、藤倉  
 五郎、後列左から、沢松和子、渡辺康二、河盛純造、皇中君代、  
 飯田藍、松島睦子、山岸成一、志村彦七、安部民雄、河尻慎、  
 太田芳郎、朝長慶子、鶴原謙造、小西一三の各選手  
 昭和スポーツ史 写真提供：ベースボールマガジン社



▲ 第59回大会から有明へ舞台を移した

その後は、比較的テニスコートを多く有している大学やクラブで隔年毎に関東地区と関西地区の交互開催が原則であったが、有明テニスの森公園開園後の第59回大会(1984年/昭和59年)からは、同公園で固定開催となった。

## 総合的なテニス大会へ

### －女子の部、混合複の追加－

第3回大会(1924年/大正13年)から、女子の部(シングルス、ダブルス)が加えられた。さらに、第14回大会(1935年/昭和10年)から、混合ダブルス種目が加えられ、総合的なテニス選手権大会としての形式が整った。

## ニューヨークカップから天皇杯へ

第20回大会(1942年/昭和17年)の男子シングルスは、鷲見保(早大)が優勝した。次に開催されたのは終戦後の1946(昭和21)年であったため、鷲見が中止期間中にニューヨークカップを保持することになった。神戸の自宅にカップを持ち帰り保管していたところ、残念ながら1945年5月の空襲で焼失してしまったといわれる。

終戦後の1945(昭和20)年11月に日本庭球協会が復興し、翌年10月に田園テニス倶楽部で第21回大会(1946年/昭和21年)が開催されたが、優勝者へのカップ授与の記録は残っていない。1947(昭和22)年8月、日本水泳連盟と日本庭球協会に「天皇杯」が下賜された。10月、甲子園テニス倶楽部で行われた第22回大会(1947年/昭和22年)からは、男子シングルスに「天皇杯」が授与されることになった。天皇杯を初めて手にした選手は中野文照(なかの ふみてる、1915年1月13日-1989年12月30日)であった。その他の種目では、女子シングルスに「秩父宮妃記念楯」、男子ダブルスに「摂政宮杯」、女子ダブルスに「朝吹杯」、混合ダブルスに「JTA杯」が授与されている。



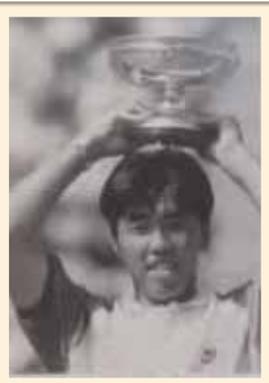
男子シングルス最多優勝は福井烈



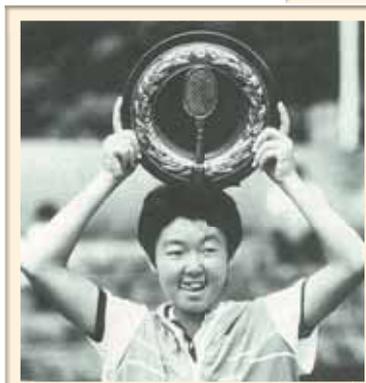
女子シングルス最多優勝・最多連続優勝は宮城黎子



男子シングルス連続最多優勝の隈丸次郎  
写真提供…ベースボールマガジン社



男子シングルス最年少優勝の谷澤英彦



女子シングルス最年少優勝は雫子牟田明子  
写真提供…ベースボールマガジン社

## オープン化

元来、全日本選手権はアマチュア選手のための大会であり、プロ選手は参加することができなかった。ところが、1960年代後半から世界のテニス界にプロ化の波が押し寄せ、日本人選手にも多くのプロ選手が誕生した。そのため、第54回大会(1979年/昭和54年)より賞金制度が導入され、オープントーナメントとなり、プロ選手にも門戸が開放され、名実共に日本一のテニスプレーヤーを決定する大会となった。

## ドローサイズの変遷

ドローサイズは、男女共にシングルス64、ダブルス32であったが、第62回大会(1987年/昭和62年)からは、都道府県代表予選が始まったこともあり、シングルス128人、ダブルス64組に倍増した。第65回大会(1990年/平成2年)からシングルス96、ダブルス48となり、第70回大会(1995年/平成7年)からはシングルス64、ダブルス32、第77回大会(2002年/平成14年)からはシングルス48、ダブルス32、第88回大会(2013年/平成25年)からは東西地方大会が開始されシングルス32、ダブルス16となっている。

## 最多優勝・連続優勝

男子シングルの最多優勝は福井烈(ふくい つよし、1957年6月22日-)の7回(1977、78、79、81、83、85、88年)、女子シングルの最多優勝は宮城黎子(みやぎ れいこ、1922年5月27日-2008年6月1日)の10回(1952、54、56-63年)である。また、宮城黎子は女子ダブルス11回、混合ダブルス9回、合計30回の全日本タイトルホルダーでもあり、更に三冠王3回、41歳5ヶ月の男女合わせて最年長優勝記録も含め、最も輝かしい活躍をした女子選手である。

男子シングルの最多連続優勝は、隈丸次郎(くままる じろう、1921年9月26日-2007年6月8日)の4連覇(1949-52年)、女子シングルの最多連続優勝は、宮城黎子の8連覇(1956-63年)である。

## 最年少優勝

男子シングルスは第64回大会(1989年/平成元年)の谷澤英彦(たにざわ ひでひこ、1971年12月5日-)の17歳9ヶ月、女子シングルスは第58回大会(1983年/昭和58年)雫子牟田明子(きじむた あきこ、1968年5月1日-)の15歳4ヶ月が最年少記録となっている。

文：後藤光将